

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：25201

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24320141

研究課題名(和文) 17世紀モンゴルの翻訳史書『明鏡』の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study of "Clear Mirror", translated Buddhist history in 17th century Mongolia

研究代表者

井上 治 (INOUE, Osamu)

島根県立大学・総合政策学部・教授

研究者番号：70287944

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,300,000円

研究成果の概要(和文)：16世紀後半よりモンゴル各地で翻訳された『明鏡』は13世紀の著名なチベット語史書『王統明示鏡』のモンゴル語訳である。本研究では、内モンゴル社会科学院所蔵のモンゴル語訳写本が北部モンゴルの翻訳であることを明らかにした。翻訳テキストを『王統明示鏡』のテキストと対照した結果、モンゴル語訳には、翻訳の都合上、チベット文字を書かねばならない部分を全て省略している場合が少数見られるが、それ以外の未翻訳部分の多くは単なる脱誤であり、意図的な改変はこれまでのところ発見していない。訳語について言えば、清代編纂の対訳語彙集に倣っていないものが散見される状態にあることが分かった。

研究成果の概要(英文)：From the last half of the 16th century, "rGyal rabs gsal ba'i me long", the famous history of the 13th century Tibet, was translated into Mongolian versions generally called "Gegen toli" in several regions of Mongolia. In this research, we analyzed a manuscript kept in the library of the Inner Mongolia Academy of Social Science and recognized that this was translated in the northern Mongolia. Comparing the Mongolian text with the Tibetan original text, we found several Tibetan passages which should be translated with Tibetan scripts were omitted, but most of the omitted passages are careless mistakes, and we have not found the intentional omissions or changes yet. As for the translational equivalents used in the Mongolian version, we found some examples which are different from the equivalents in the Tibetan-Mongolian glossaries compiled in Qing era.

研究分野：東洋史

キーワード：『明鏡』 『王統明示鏡』 翻訳文献 モンゴル語文献

1. 研究開始当初の背景

チベット文化とその言語は、モンゴルの宗教や言語文化、歴史観に大きな影響を与えてきた。たとえば、チベット語仏典をモンゴル語に翻訳する際の訳語を統一するために、18～19世紀にかけて、対訳仏教語彙集が数多く編まれた。関連する研究は19世紀中盤から現れ、近年も研究に有益な翻刻が刊行されている。一方、対訳仏教語彙集編纂以前に成立した16～17世紀のモンゴル語史書類のテキストは、対訳仏教語彙集の訳語や表現、構文に必ずしも忠実でないところがあるため、当該時期のモンゴル語史書の約三分の一の記述量を占め、しかもチベット語史書の影響を強く受けているインド史、チベット史、モンゴル帝国史、元朝史にかかわる部分の研究は十分ではない状況にあった。

そこで、上述の対訳仏教語彙集研究の成果を踏まえて、16～17世紀のモンゴル語史書のテキスト生成過程や、その語彙や表現を研究することを構想し、対訳仏教語彙集成立以前にかかるモンゴル語翻訳史書を探求した結果、14世紀の著名なチベット史書『王統明示鏡 *rGyal rabs gsal ba'i me long*』のモンゴル語訳本である『明鏡 *Gegen toli*』内モンゴル社会科学院蔵本を取り上げることとした。この本は、翻訳史的側面からの専論が一本しか現れていない、未だに未開拓のものである。

このような翻訳史書には原典が存在するために二次的なものと見なされることが多いためか、未だに十分な研究が行われていない状況にあった。以上が研究開始当初の状況であった。

2. 研究の目的

本研究では以下の諸点を目的とした。

- (1) 『明鏡』の内容の全体像を明らかにする。
- (2) この古写本の形態的特徴を明らかにし、写本自体が持つ価値を明らかにする。
- (3) 原典と翻訳のセンテンスや語彙の対応関係を明示する。
- (4) 訳者・翻訳時期・翻訳意図・書写時期を明らかにする。
- (5) 翻訳者の原文解釈のあり方と翻訳構築方法を考察する。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、以下の方法によって研究を進めることとした。

- (1) 『明鏡』のテキスト全てをラテン文字で転写する。
- (2) 『明鏡』写本を所蔵先で熟覧し、料紙とその加工様態、用筆、墨、書風などから、その形態的特徴を明らかにする。
- (3) 対照すべきチベット語原典あるいはもっとも流布したと目される本を選定し、そのチベット語テキストのラテン文字転写テキストを作製する。
- (4) 『明鏡』と原典の平行テキストとグロッサリーを作製する。

(5) コロフォンの内容を仔細に分析する。

(6) 『明鏡』が採用した訳語と原典の意味とのズレを発見することで、翻訳者の原文解釈のあり方と翻訳構築方法を考察する。

4. 研究成果

(1) 古写本の形態的特徴と価値について

この写本は、植物繊維を粗く粉砕して作られた紙を複数貼り合わせて料紙としている。これは中国産の上質漉紙が流布する以前のモンゴルで広く使われていた典型的な手漉紙であり、現存するモンゴル古籍の料紙としては比較的古層に属するものである。筆は、古層の写本に常用される、植物の茎(葦か竹)が樹枝を削って作ったものが用いられている。文字は、16世紀末から17世紀の写本によく見られる書風であるが、その形態上の特徴から書写された地点を推測することはできなかった。墨は黒と朱の二色が用いられている。また、後代の加工になる可能性があるが、書写の不鮮明な箇所や文字が枠線をはみ出した箇所などに白色の塗料(砥粉の類か)が塗布されているところから、精緻な手入れを施されていた写本であることがわかる。さらに、表紙には錦が貼られているところから、この写本が珍重されていたことが推測される。以上の観察結果から、この写本は17世紀になった一本である可能性が高く、現存するモンゴル語写本の中では作製時期が古い部類に属し、作製当初から珍重されていた形跡をとどめる貴重な写本であるといえる。

(2) モンゴル語テキストについて

写本熟覧と平行して解像度の高い写真を撮影し、これに基づいて全テキストをラテン文字で転写した。

転写の過程でテキストのいくつかの特徴を把握することができた。綴字法や単語・接尾辞の形態は13世紀の前古典期モンゴル語と正書法が確立に向かう19世紀以降の近代モンゴル語の間の古典期モンゴル語の特徴をよくとどめており、近現代の正書法とは異なる綴字上のゆれが甚だしい。17世紀初頭、サンスクリットやチベット語を表記するための特殊な文字(アリガリと称する)が多用されているが、やはり18～19世紀に確立されたアリガリの形や用法とは異なった点が多く発見されるところから、この写本が17世紀に作製されていた可能性が高まる。

もう一点、近現代正書法に従わない綴字上の特徴として、母音a/eとiが相互に交替して書かれる現象が多く見受けられることがある。この交替現象が書写された地域の音韻上の特徴を反映したのかどうかは今のところ決めがたい。

一方、一見すると文字は精緻かつ流麗に書かれているが、仔細に観察すると文字要素の過不足に由来する誤写と脱落が多くある。これほどの写本を書き上げるほどの能力がありながら、ごく初歩的な誤脱を犯した理由は

見出しがたい。この写本には、語句の誤脱を補った箇所が多く存在することから、おそらく、この写本作製にあたっては別のモンゴル語底本が参照されたと考えられる。このモンゴル語底本の綴りを見間違えて誤脱に及んだものと考えられる。何よりも、書写漏れ(脱落)を補記しているところから、その誤りを発見する材料があったことが強く推測されるので、この写本は二次写本である可能性が高いと考えられる。ただしこの推測に対してはまた別の推測を立てることができる。すなわち、底本は存在するが、それはモンゴル語で書かれたものではなく、翻訳に用いたチベット語原典であるとの推論である。チベット語が忠実に訳されているかを点検する際に、訳し漏れに気がついて、これを補訳したと考えるのである。いずれの推論を支持すべきかは断じかねるが、この写本に見える誤脱の特徴は、あるモンゴル語底本を書写して成った他のモンゴル語写本にも頻繁に看取されるものであるところから、底本はモンゴル語で書かれたものであったという推論により高い蓋然性があるものと考えている。

(3)チベット語原典の探求について

翻訳者の手元にはどのようなチベット語原典が存在したのかを見極めるために設定した作業であったが、取りそろえた五種のチベット語本のいずれがその原典であったかを確定する決め手を見出すことができなかった。研究を先に進めるため、もっとも流布したテキストであろうと思われるデルゲ木版本を用い、ワイリー式に従って転写したテキストを作製した。

(4)パラレルテキストとグロッサリー

作製の済んだモンゴル語とチベット語のテキストを並置したパラレルテキストとグロッサリーを試作した。ここであえて「試作」と称しているのは、モンゴル語とチベット語のシンタクスが異なるため、単純な並置テキストは作製できたものの、あるチベット語の表現がモンゴル語に翻訳する際に分解される現象が多くあり、厳密な意味でその対応関係をパラレルに表現することができないままであるためである。なおこの種の現象はグロッサリー作製に大きくは影響していない。

パラレルテキストに基づく分析から、モンゴル語に訳されていないチベット原文テキストが発見された。このような未翻訳の箇所には、翻訳者が何らかの意図を持ってその部分を訳さなかったものであることを期待したが、大部分は理由を明らかにすることができていない。上の(2)で推測したように、このモンゴル語訳写本には底本が存在すると思われるが、このように存在が推測される底本は内モンゴル社会科学院には現存しないため、底本においてすでに未翻訳となっていたのか、それともこの写本が書写・作製された段階で写し損ねたのかを判断することも

できていない。しかし、上述したように、この写本に見える誤脱がよく補記されている状況を踏まえると、その存在が推定されるモンゴル語底本において未翻訳の箇所があったものと思われる。

この写本における未翻訳部には一つの特徴的な傾向が存在することが判明した。それは、インドの文字に基づいてチベット文字が考案された部分の箇所に典型的に見て取れる。その部分では、チベット文字そのものを書き表す必要があるため、モンゴル語に翻訳することができないのである。チベット語からモンゴル語に翻訳した大抵の文献では、モンゴル文字で書かれた語の間にチベット文字を直接表記したり、チベット語やチベット文字を転写するための特殊な字母アリガリを用いて転写表記したその脇にチベット文字の綴りが併記されている場合が多く看取される。しかし管見の限り、この写本にはチベット文字が書かれていないのである。よって、チベット文字が考案された件を翻訳した箇所は意味が通じにくくなっている。この写本を書写した写字生は単に写字しかできない者であり、チベット文字を習得していない者であったとの推測が可能ではあるが、そのようなことを裏付ける確証は得られていない。このようなチベット文字の不表記が意図的なものなのか否かは俄には判じがたい。

このような未翻訳問題に突き当たって我々は、他の『明鏡』のテキストではどのように訳しているかを探求する必要性を強く感じるに至った。運良く、内モンゴル社会科学院蔵になる別バージョンの写真を入手することができた。これは、トド文字とよばれる、西部モンゴル方言を書写するために17世紀に考案された改良型モンゴル文字で書かれたバージョンであるため、未翻訳部分の有無を確認するためのみならず、翻訳の地域差を発見しうる格好の材料と期待した。しかしながら、内モンゴル社会科学院でこの原本を探求したところ行方知れずとなっているため、この西部モンゴル方言バージョンが真に存在するか否かを確認できないため、この写真に依拠した比較研究は断念せざるを得なかった。また、北京にある国家図書館善本部には、現存する『明鏡』の最古のバージョンであろうと思われる、現在の内モンゴル自治区オールドス地方の翻訳家サジャ・ドンロブの手になる写本が蔵されていることを知ったので、さっそくに閲覧を希望したが図書館側の都合により実見が叶わなかった。さらにロシアのサンクトペテルブルク大学図書館にも西部モンゴルバージョンの『明鏡』があるので、その複製の入手も試みたが、これを入手できたのが研究期間終了の直前になってしまったため、期間内に未翻訳問題を深く探求することはできなかった。しかしながら、このような別バージョンとの比較対照を重要な課題として浮上させることができたことはひとつの成果であると捉えている。辛抱

強く別バージョンの収集に取り組んでいきたいと考えている。

このような課題を残していることを十分に自覚した上で、分析の対象に据えた『明鏡』写本の訳語について総合的に言えば、確かに18～19世紀の清朝治下で編纂されたチベット・モンゴル対訳仏教語彙集に定められた訳語に準じていない例は存在するものの、それは大量ではなく、むしろその対訳仏教語彙集と一致している例の方が多いと判断している。そもそも対訳仏教語彙集の方が後発である以上、それ以前の翻訳文献の用語にばらつきや不一致があるのは当然であるといえる。本研究では、チベット語テキストとモンゴル語テキストの対照に主眼を置いたため、18～19世紀編纂の対訳仏教語彙集との出入りを十分に確認するには至っていない。この確認作業ならびにその出入りを対訳仏教語彙集の成果に上乘せすることも本研究が残した課題であると認識している。

(5) コロフォンの分析

本研究で扱った『明鏡』のコロフォン(奥書)には、「メルゲン・オトチ(Mergen Otuci)」という訳者の名前が明記されているばかりでなく、「オチル・ハーンの次代の子」という血縁関係と、「小さき僧侶」という身分も記されている。問題となるのは、「オチル・ハーン」とは誰なのかという点と、「次代の子」とは「オチル・ハーンの子供」と解してよいのかという点である。本研究グループでは、「オチル・ハーン」とは、ダライラマよりこの称号を賜ったハルハ・モンゴルのアバタイを指すと見ているが、このアバタイの「次代の子」に「メルゲン・オトチ」に相当する人物は見いだせない。研究グループの一部は、アバタイの次男にして末子の名がエレヘイ・メルゲン・ハーンと記録されていることに着目し、さらに「メルゲン・オトチ」の「オトチ」が末子を意味する可能性が高いことを挙げて、「メルゲン・オトチ」を「(アバタイの)末子メルゲン」の意味に取り、エレヘイ・メルゲン・ハーンに相当するとみている。この推測に従えば、訳者は1578年に生まれ1620年代に没した、17世紀のハルハ・モンゴルの王であることになる。一方、「オトチ」は「医者、医僧」を意味する「オタチ」の別表記であること、このような翻訳を成し遂げられるのはチベット語に習熟した出家であろうと思われることから、アバタイの後代の者で出家した者がこれにあたると思われるが、それにあたる可能性を持つ者がアバタイの二人の子の中には見いだせず、孫以降の代には何人かの候補者がいるがそれを絞り込むだけの情報がないという嫌いがある。翻訳意図はコロフォンには明記されていない。また、この写本が書写された時期も記述されていない。

(6) 翻訳者の原文解釈と翻訳構築方法

これについては、原文と訳文との間に有意な差異を見出すことが未だにできていないので、明らかにしえたところはない。

(7) 成果の刊行について

下に示したように、本研究の成果はいまだ発表する段階に至っていない。そのもっとも大きな理由は、『明鏡』内モンゴル社会科学院蔵本を刊行する許可が同院から得られていないことにある。これに加えて、上述したように、別バージョンとの比較が本研究が到達している成果をさらに高める可能性があるため、現在、入手できた西部モンゴル語バージョンをどのようにして現今の成果に組み込むか、北京国家図書館蔵になる内モンゴル写本の実見調査や複製入手のための折衝を継続するか、パラレルテキストの体裁をどのように整えるのがふさわしいかなどをめぐってグループ内で協議を進めているためである。

また、本研究を通じて知ることのできた情報として、たまたま北京国家図書館蔵の内モンゴル写本の冒頭数ページを目にした経験がある本研究グループの一人が、その写本の形態上の特徴とよく似た古写本が大阪大学に所蔵されていることに気がついた。これはパドマサムバヴァ伝として知られる伝記のモンゴル語訳古写本である。全く偶然なことに、このモンゴル語訳パドマサムバヴァ伝は北京国家図書館蔵内モンゴル写本『明鏡』の訳者であるサジャ・ドンロブの翻訳になることがコロフォンに明記されている一本である。このモンゴル語訳パドマサムバヴァ伝について本研究グループは初歩的な観察をおこなったのみで具体的な研究には着手していない。目下の課題である『明鏡』の複数バージョンにわたる総合的研究をまとめた後に、このような珍奇な翻訳文献の語彙面での研究を付け加えることを将来的目標として設定し、研究の更なる発展を図りたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 治 (INOUE, Osamu)
島根県立大学・総合政策学部・教授
研究者番号：70287944

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

チョイジ〔喬吉〕(Coyiji〔Qiaoji〕)
アガタ・パレヤ-スタジンスカ
(BAREJA-STARZYŃKA, Agata)